もうひとつの第一次世界大戦

――「人種」の諸相の米仏比較（1）――

松　本　悠　子

はじめに

筆者を含めたアメリカ合衆国（以後，アメリカ）史の研究者にとって，「人種」はアメリカ社会の分析を行うために常に見落としてはならない要素であり，人種関係あるいは人種認識は，ある意味では，アメリカの歴史を考える前提とされてきた。アメリカ史研究者は，往々にして，そこから，人間社会にはどこでも人種主義の歴史があると考えがちである。ところが，フランスでは「人種」認識はあまり議論の対象とならないという。フランスも，自由，平等などアメリカと同じ普遍的価値を国是とし，19世紀にはアメリカとフランスは『姉妹共和国』と一部から呼ばれていた。また，フランスはアメリカ同様移民受け入れ国であり，19世紀までは植民地に奴隷制が存在し，帝国主義時代以降も植民地との深い関係の歴史がある。にもかかわらず，フランスでは，「人種」は歴史の主要なテーマとしてなかなか認められなかった。では，アメリカ合衆国の「人種」の歴史は，アメリカ合衆国の歴史が例外的に生み出したものなのであろうか。あるいは，フランスは，例外的に人種主義を論じる必要のない国なのであろうか。

フランスでは，「人種」を論じるにあたってアメリカと比較する事が多い。たとえば，社会学者のミシェル・ヴィヴィオルカは，「人種化された社会」であるアメリカや「英米圏」で論じられている「人種関係」の概念

が必然的に「人種概念を認め，正当性を与えるものとなる」が，フランスでは，「人種概念を正当とみなし，人種というカテゴリーが社会的現実によって作りだされ，不可避なのだという考えを受け入れる事には抵抗が見られる」と主張する[1]。このような米仏の「人種」に対する見方の違いは何に由来しているのだろうか。たとえば，フランス植民地主義の歴史に詳しい平野千果子は，「人種」に関して更なる研究が必要である事は認めてはいるものの，フランスが「人種」に関して「寛大な国」であるという認識を紹介し，その対局としてアメリカを挙げている。平野によれば，アメリカは歴史的に国内に奴隷制を持っていたのに対し，フランスは植民地という遠隔の地に非白人人種をかかえていたために，アメリカの方がより厳しい「人種」観が形成されたという。また，第一次世界大戦で初めて大量のアフリカ人兵士がフランス本土で戦ったのだが，フランスのために戦ったという事で好意的に迎えられた事を指摘している[2]。

たしかに，奴隷制とその廃止後の「人種」の顕在化の歴史は，様々な意味でアメリカの歴史の根幹にある。しかし，奴隷制がない国にはアメリカ合衆国のような「人種」観がなかっただろうか。もしアメリカ合衆国だけが例外であるならば，ヴィヴィオルカもそうであるように，多くのフランス研究者が，なぜイギリスを巻き込んで「英米圏」の「人種関係」をひとまとめにして論じるのであろうか。イギリスも本国内には奴隷制を持たない国である。しかも「人種」をアフリカ系に限らなければ，多様な地域の「人種主義」の歴史とフランスの歴史を比較する必要があろう。

さらに，アメリカ史研究者にとって理解を複雑にしているのは，アメリカにおいて，フランスは「カラー・ブラインド」であるという見方が広く受け入れられてきた事である。とりわけ，アフリカ系アメリカ人の側からそのような見方が多く出されてきた。アフリカ系アメリカ人活動家のW. E. B. デュボイスの言説はよく知られているが，アフリカ系アメリカ人紙の『クライシス』紙もフランスは「白人の民主主義のなかで唯一真の民主

主義」だと論じている[3]。他の20世紀前半のアフリカ系アメリカ人の著作や文化においても，第一次世界大戦時にフランスが彼らを「解放者」として歓迎した事が，コスモポリタニズムへの契機となっているという[4]。フランス史の研究者も，フランスの「人種主義」の希薄さの証左として，アフリカ系アメリカ人の言説や1920年代のアフリカ系アメリカ人芸術家のパリでの活躍を挙げているのである[5]。

ある国の歴史は，外から見た方がよく見える事がある。フランスの「人種」の歴史も，「カラー・ブラインド」のフランスという見方に反応する形で，英語圏で多く分析されてきた。アメリカ人研究者でフランスの「人種」の問題を精力的に研究している研究者のうちのひとりは，タイラー・ストヴァルであるが，彼は「カラー・ブラインドなフランスという神話は複雑であるが誤っている」と断言する[6]。近年のフランスの黒人運動を分析している研究者は，「共和主義，人種中立的でリベラルな国」という理念としてのフランスと「人種による分類があり，排外主義的で保守的な国」という現実のフランスという古典的な対立の狭間で，黒人運動が展開しているという[7]。普遍的理念と現実の乖離あるいは矛盾という問題を抱えているのは，アメリカも同様である。2003年にフランスの「人種」の歴史に関する論文集を編集したカナダのスー・ピーボディは，その点に注目し，フランスとアメリカの比較が必要であり，フランスの歴史においても「人種」が重要な要素であったと論じている[8]。本稿では，対極とされた米仏における「人種」認識の歴史の実相を再考する第一歩として，第一次世界大戦期のフランスに関する英語圏の研究を紹介しながら，問題点を明らかにしたい。

1．第一世界大戦と「人種」

19世紀後半から第一次世界大戦までの時代は，欧米諸国が本国で同質的

な国民化を推進しながら，一方で帝国主義的政策によって多様な異質な人々を統治下におさめようとした時期であった。とりわけ第一次世界大戦は，非白人人口の移動を促し，大西洋の両側において，「人種」が社会的問題として浮上してきた時期である。第一次世界大戦に参加したすべての国の統計から非白人兵士と労働者をあわせると，約400万人に上るともいわれ，彼らは，アフリカ等の植民地だけでなくヨーロッパ本土においても戦闘や労働に参加した。第一次世界大戦のこのような非白人人口の移動に近年，関心が高まっている。イギリスにおいても，第一次世界大戦の多人種的構造に近年注目が集まっており，たとえば，2011年の論文集では，中国人労働者，ヴェトナム人の経験，インド兵，アフリカ系などの視点から第一次世界大戦を論じている[9]。

なかでも主戦場の一つとなったフランスの人々は，ヨーロッパからの移民や外国人部隊だけでなく，初めて大量のアフリカ植民地，カリブ海やインドシナ半島の植民地からの兵士や労働者，中国からの労働者などの非白人とフランス本土で出会うことになった。第一次世界大戦において，ある統計によると，約16万人の西アフリカ人，マダガスカルから４万6,000人，インドシナから５万人，アルジェリアから14万人等，合計で約50万人の兵をフランスは植民地から動員した。彼らは，フランスだけでなく，アフリカやバルカン半島，中東にも派遣され，戦闘や軍の労働に貢献した。たとえば，フランスに派遣されたヴェトナム人兵の戦闘大隊は四つで，さらに15の労働大隊が西部戦線で，塹壕を掘ったり，弾薬を輸送したりという業務を行っていた[10]。

兵士に加えて，労働者も大規模に移動した。とりわけ，イギリスとフランスは，中国から約14万人の労働者を契約労働者としてフランスに迎えた。戦時中だけでなく，終戦直後には，中国人労働者が西部戦線の戦場を清掃し，仏領植民地アフリカ兵は1921年までルール地方に駐屯し，ドイツ側の人種差別的なプロパガンダにさらされたのである[11]。アフリカ系アメ

リカ人兵を加えると，戦時中フランスだけで，100万人以上の非白人男性が何らかの形で戦争に関わったといわれる。これまでイメージしか持っていなかったアフリカ出身の人々，あるいはイメージとしても希薄であったろうアジアの人々に，フランス人は日々の生活で接する事を余儀なくされたのである。さらに，短い期間であるが，アメリカ軍がフランスに駐留し，アメリカ社会の白人が当然と思っていた人種秩序を持ち込もうとした。と同時に，アフリカ系アメリカ人が，アメリカ社会の外の社会を経験する事になったのである。第一次世界大戦という，ある意味では極限の状況で，彼らが出会ったとき，どのような「人種」意識が交錯したのであろうか。

最も多く動員された仏領アフリカ植民地出身の「原住民」兵士（仏領植民地アフリカ兵）[12]は，第一次世界大戦で初めてフランスの戦いに参加した訳ではない。19世紀後半に既に彼らは多様な地域で戦闘に参加しており，1899年の7月14日のパリのパレードには，フランス史上初めて西アフリカ出身の兵士の小集団が参加した[13]。

20世紀に入って，彼らが大規模に兵士として動員された背景には，当然フランス側の兵力不足等の根本的原因がある。しかし，「人種」認識の視点から注目したいのは，動員を推進した要因のひとつに，1910年から1911年にかけて「黒い戦力」の活用を推奨したシャルル・マンジャンの精力的な議論があったことである。まず，「黒い戦力」という言葉に注目したい。植民地部隊でも，セネガル軍でもなく，「黒」という言葉が飛び交ったことは，当時，出身地域に関わりのない「黒人」という人種認識が既にあった証左であろう。さらに，マンジャンは，仏領植民地アフリカ兵の「人種」としての生物学的および文化的特徴を強調した。たとえば，彼らは神経システムがあまり発達していないため砲火を浴びても動じず，痛みにも強いとか，アフリカは歴史を通じて戦いを繰り返していたので，戦争を好む本能が身に付いた「生まれつきの兵士」であるといった説明をしたので

ある。また，マンジャンは，「黒い戦力」のヨーロッパでの戦争の有用性も説き，寒い気候にも，「人種」として耐えられると，アメリカの北部に住むアフリカ系アメリカ人の例を出して論じている。この論においても，出身地域や歴史に関わりなく，「黒人」としてのカテゴリーの存在をマンジャンが信じていた事が分かる[14]。この提案に反対する軍部の意見も，彼らには忠誠心がなく，簡単に興奮し，規律がとれない，などといった人種偏見に満ちたものであった[15]。すでに「人種科学」などによる「人種」の序列化の言説が流布していたことと考えあわせると，「人種」認識が政府，軍部の人々の間に確立していたといえよう。

1914年8月の開戦の1カ月後には，仏領植民地アフリカ兵，いわゆるセネガル兵はフランス本土に上陸した[16]。仏領植民地の西アフリカ出身の兵士は，当時，「セネガル狙撃兵」と総称され，「獰猛な戦士」で「首をはねる」といったイメージで語られていたのである[17]。しかし，ドイツの強い人種主義的なプロパガンダが行われた事もあって，フランスではアフリカ兵の忠誠心や規律正しさを強調するプロパガンダが，政府，軍部，新聞等により行われた。たとえば，植民地省大臣のガストン・ドミニクは，1916年11月，彼らの勇気，忠誠心，規律等軍人としての特質を「セネガル人」は持っており，「真の野蛮人の不正で横暴な攻撃」に対する勝利に貢献すると演説した。また，メディアや大衆向けの戦時中の出版物では，「大きな子供」といった表象が多く見られた[18]。「セネガル狙撃兵」が第一次世界大戦前後多くの商品に描かれたが，そのイメージは，友好的だが，子供っぽく，のんきな表情の「良い黒人」であったという[19]。アフリカ系の兵士に関して，勇敢で忠誠心はあるが，指導者には向かず，生まれつきの性格として欲望等の抑制が利かず，非文明的であり，白人の知的優越性の下の「未熟な人種」とみなされていたという点では，ヨーロッパを通じて一致していたという[20]。やはり，「人種的言説」はついてまわったのである。

フランス滞在中も，仏領植民地アフリカ兵は「人種」を意識せざるを得

なかった。フランス軍で彼らを担当した医師たちも，彼らを子供のようで，抽象的思考に耐えられないと記すなど，生物学的人種主義を論じていた。また，植民地兵とフランス人の接触を避けようとする当局の方針が見られた。新たな仏領植民地アフリカ兵のための宿営地は，できるだけ民間人と接触がない孤立した地域に作るべきだという指令が出され，隔離された病院の建設も計画された[21]。軍隊内部に関しても，オーラルヒストリーを分析した研究者によると，様々な摩擦があったという[22]。とりわけ，「セネガル４都市」出身の兵は，白人部隊に多く入れられたので，日々の接触のなかで人種的言説を多く浴びせられたという[23]。また，兵士たちの手紙を分析した研究者は，実際の個人同士の接触の場面では愛憎半ばしたが，フランス本国出身の白人兵は仏領植民地アフリカ兵を自分たちとは違う他者としてみており，依然として「野蛮」な人種というイメージが残されていたと論じている[24]。

このような状況において，仏領植民地アフリカ兵の立場の改善を訴え，さらに兵士を動員する事によってその貢献をフランス本国に認めさせようとしたのが，ブレーズ・ディアニュである。ディアニュは，「セネガル４都市」といわれる地域から1914年フランス国民議会選挙において，初の「黒人」議員に選出された。ディアニュは，「セネガル４都市」出身者もフランス市民である事を主張し，その証しとして，４都市出身の兵士を白人部隊に編入する事を求めた。当初，ディアニュの働きかけに対して，白人部隊に仏領植民地アフリカ兵を入れるのは，規律と団結の上で好ましくない等の反対があった[25]。しかし，ディアニュは，1915年，1916年のいわゆるディアニュ法で，４都市出身の兵士を「黒人部隊」ではなくフランス本国人からなる部隊に編入する事を可能にした。ただし，他の仏領アフリカの地域から徴兵された「臣民」（市民ではない）は「黒人部隊」にまとめられている。さらに，1916年の法律でセネガルの４都市のアフリカ人住民すべてにフランス市民権が付与された。フランスでは，旧来，フランス

法，特に民法を遵守する事が市民権の条件であったが，セネガルにおいては，イスラーム法を守りながら市民となる道が認められたのである[26]。

ただし，現実の軍のレベルでは，どのように「白人」兵と「黒人」兵を組織するかは，それぞれの指揮官によるところが大きかった[27]。統計上から見ても，必ずしも平等に混合が行われていたとは想定できないとある研究者は指摘する[28]。兵士の待遇に関しては，傷病兵に対する支払いや一時休暇での帰郷等も徐々に認められるようになったが，手紙の検閲や地元住民との接触の制限等は設けられていた[29]。また，ディアニュの提案によって，仏領植民地アフリカ兵は，寒さに耐えられないという事で冬期は南フランスに駐屯した。当局は，この間の規律の乱れを心配し，彼らは一部労働にまわされたが，白人兵とは異なる処遇をされたのである[30]。この特別待遇をどのように考えるか，「人種」認識が軍隊や地域社会に広まる要因の一つとならなかったかどうか，さらなる検討が必要である。

仏領西アフリカ植民地からさらにアフリカ人兵の動員が求められたとき，現地の徴兵委員会は機能せず，人物の確定もままならなかった。徴兵に対する抵抗も起きており，現地の管理責任者はその状況を本国に報告している。また，4都市出身者以外の青年に対しては，徴兵に応じても「黒人部隊」に入れられる等，現地での不公平感も高まっていた[31]。ディアニュは，1918年，兵力確保のために，黒人部隊高等弁務官に任命されて，西アフリカを回り，それまでの力づくでなされた動員とそれに対する抵抗事例を見て，プロパガンダと恩典による動員を行った。その際，退役兵には「原住民法」を適用しない，人頭税の免除を行う等の恩典を宣伝した。1918年の法令では，半分は家族に支払われるボーナスや，戦場で目覚ましい働きをしてメダルをもらった兵士とその家族は市民権を請求する権利がある事などが決められた。また，戦後，ディアニュは，大戦中の西アフリカでの兵士動員に際して，2つの点を訴えたと証言した。一つは，「フランスへの感謝」であり，2つ目は，フランスが負けた場合，ドイツによっ

て「人種主義」が強調される事への恐怖である[32]。

このようなディアニュによる法の制定と動員に関して，ムスリムでも市民権を得る道をフランス本国が開いた，白人部隊に参加する事により本国市民と同等の資格を認められたという評価が主流である[33]。しかし，逆にみれば，ディアニュの提供した恩典の対象とならなかった大多数の人々が浮かび上がってくる。とりわけ，「原住民法」の免除を恩典と考えられていた事実は重い。「原住民法」には，夜間外出の制限，集会の制限等の規則があり，市民にとっては当然の権利が圧倒的大多数の市民になれない「原住民」すなわち非白人にとっては犯罪行為として罰則が与えられていたのである[34]。19世紀前半のアメリカ国内の自由黒人に対する制限と共通する項目を持つ「原住民法」の存在は，重視されるべきではないだろうか。また，市民権取得の可能性は，開かれたといってもあくまで一部の人に限られていた。それでも道は開かれていたのであるから，「人種」あるいは植民地出身である事に基づく差別があったとはいえないという論理もたてられるだろう。ディアニュは，「カラー・ブラインド」のフランスというイメージの象徴としてアメリカ人にも影響を与えたという。しかし，憲法修正で投票権が認められながら，実際にはそれを行使できなかった20世紀前半までのアメリカ南部のアフリカ系アメリカ人の歴史を知るアメリカ史研究者としては，法律に基づく論理がどこまで社会の現実を反映しているか，理念や思想としてではなく歴史として考える時，疑問が残るのである。

1924年，ディアニュは，フランス植民地行政に批判的な「黒人向け」の雑誌 *Pan-noir* で彼の事をフランス植民地主義の手先であり，第一次世界大戦の兵士動員において賄賂を得ていたと批判したルネ・マランを訴えた。この雑誌は，アフリカで出回っており，ディアニュは自ら記事の内容を否定する必要があったのである。ともにフランス人である事を自認したうえで，マルティニク出身の黒人の小説家でありアフリカのフランス領の

行政官をつとめたマランは，カリブ海出身者として「母国」アフリカに憧れ，フランスの教育や市民としての平等をアフリカのために求めた。一方，ディアニュは政治家として，どのように宗主国フランスと交渉するかを考え，「血の税金」といわれたフランス軍への動員もその一つの手段としたのである[35]。このディアニュの認識は，デュボイスをはじめとするアフリカ系アメリカ人運動の指導者たちが，若者たちに徴兵に応じるよう勧めていたことを想起させる。彼らもまた，戦争への貢献はアメリカ社会のなかの平等と尊厳を約束するだろうと説いたのである[36]。

ディアニュが予想した通り，仏領植民地アフリカ兵にとって，戦争で戦った事は大きな意味を持ったと思われる。あるセネガル兵のオーラルヒストリーによると，戦後，帰国の船のなかで，白人から「汚い黒人」と呼ばれた時に仲間とともに反撃したその兵士は，「戦争前には，フランス人からいつもこのように扱われていて私たちは弱かった」，しかし，今「私たちは，権利を持つフランス市民である」と述べている[37]。と同時に古くからの部族意識を越えた仏領植民地人としてのアイデンティティ，特にイスラームの仲間意識が戦争を通じてつくられたという[38]。この点に関しても，戦争を経験したアフリカ系アメリカ人の動きに共通点が見いだせる。「他者」として位置づけられた人々の国民国家への参入の望みとともに，「他者」であるが故の連帯感が正当な権利を求める動きにつながるという流れは，20世紀の歴史を考察する上で欠かせない視点であろう。

では，その「他者」としての連帯がどこまでの広がりを見せるのだろうか。20世紀初頭の汎アフリカ運動は，植民地支配の打倒を目指し，共通の抑圧のもとにある「黒人」の権利を守る必要があると主張し，「白人の重荷」という考え方を批判した。1919年にはデュボイスとディアニュを中心に汎アフリカ会議がヴェルサイユで開催された[39]。ただし，ディアニュは，当初汎アフリカ主義の指導者のひとりであったが，その後，批判的になっている。また，実際にフランスで出会った時，アフリカから来た兵と

アフリカ系アメリカ人の兵が「黒人」としての意識を共有したかどうかは定かではない。ある研究者は，アフリカ系アメリカ人とフランス植民地アフリカ人は，それほど関わりを持とうとしなかったという[40]。この点も，「人種」意識に関して興味深いテーマを提供すると考えられる。

2．非白人労働者

第一次世界大戦は，どこの国にとっても，初めての総力戦であったが，自国民だけではまかないきれず，フランスや，ヨーロッパ大陸で戦うイギリス軍，アメリカ軍にとっては，労働力の不足は兵士の不足と同様に緊急の課題であった。フランスは，ポルトガルやスペインなどからの外国人移民を受け入れただけでなく，植民地から労働者を徴用し，さらに中国人の契約労働者を募った。その際，同じ外国人労働者でもヨーロッパからの労働者と非白人労働者では待遇が異なり，「人種」による衝突事件が起きていたのである[41]。第一次世界大戦に動員された多様な人々に関する論文を編集したサンタニュ・ダスも，兵士に関しては仏領植民地アフリカ兵やアフリカ系アメリカ人兵に対して「救済者」あるいは「解放者」というイメージがあったが，労働者はフランス人にとって競争者であり，フランス人女性を危険にさらすものとして，排斥事件がしばしば起こったと指摘している[42]。

なかでも特徴的なのは，中国からの大量の労働者の流入である。戦争勃発と前後して，イギリスとフランスは，中国まで係官を派遣して，中国人労働者を契約労働者として勧誘した。中国側も，知識人を中心にむしろフランス行きを奨励したという。1916年以降フランスに入国した中国人労働者は，フランス全土の軍事産業や建設業に配置され，地方の小さな宿営地で生活した。戦争が長引くにつれて，中国人労働者は，前線の近くで，戦死者の埋葬や塹壕の修復等にもかり出された。彼らを監督する行政官庁

は，植民地労働者組織局であり，中国は植民地ではないにも関わらず，フランスの中国人労働者に対する位置づけは，明らかに植民地からの非白人労働者と同等であった。植民地の支配・被支配関係において不可視化されている「人種」認識の問題が，中国人労働者の処遇の歴史において顕在化したといえるのではないだろうか。

イギリスもフランスも中国人労働者を軍隊の規則で管理し，罰則も軍の法律で定められた。フランスにおいても，法的には中国人労働者や植民地からの労働者は宿舎も隔離され，仕事でも宿舎でも監視をつけなければならなかった。ただし，イギリス軍の扱い方と比較するとフランスでは，中国人の外交官が常駐していた事と契約が細部までつめられていたこともあり，法的措置の施行はそれほど厳格でもなく，宿営地での自由も比較的あったという。といっても，彼らは，あくまでも戦争のために契約された労働者であり，フランスへの定住は認められなかった。終戦後，当局は，あらゆる手段を使って彼らを帰国させようとし，パリやマルセイユでは警察による一斉検挙もあった[43]。中国人労働者は，フランスにとってもイギリスにとっても自国の若者を戦場に送るための要員であり，中国人労働者の歴史を研究した研究者は，中国人労働者の存在が「西洋の脆弱さ」を象徴したと論じている[44]。

実際に地域のフランス人の間で働いた中国人や他の非白人労働者は，多くの摩擦を経験した。彼らは，競争者，あるいは，フランス人男性を前線に送り出すための手段，フランス人男性のかわりに働いている女性労働者の賃金を下げるための政府や資本家の道具だとみなされ，さらに非白人である事が摩擦の要因のひとつになったのである。各所で，非白人労働者とフランス人労働者の間で摩擦が起こり，非白人労働者が夜間に収容施設を出るとフランス人に襲撃されたという事件も報告されている。中国人労働者も工場の待遇に抗議してストライキをする等の自己表明をし，フランスの地域のメディアが「傲慢な優越感」を中国人労働者が持っている等と報

道，地方自治体が中国人労働者の「犯罪」に関して不満を表明する等，中国人労働者を受け入れた地域には緊張感が高まっていた。このような問題の噴出で，1918年の戦争省の報告では，中国人労働者の呼び寄せは失敗であったとまで記載されている[45]。仏領インドシナから徴用されたベトナム人労働者たちもまた，工場では，フランス人労働者を見習って自らの権利を主張し，フランス人女性をめぐってフランス人やアフリカ系労働者と対立し，地域では緊張が高まったのである[46]。

1917年に参戦した後，アメリカ海外派遣軍もフランスが契約した中国人労働者のうち1万人をフランスから借り受けた。彼らの主な仕事は，銃弾の輸送と塹壕を掘る事であった。アメリカ兵の中国人労働者に対する暴力的扱いやアメリカ軍が強制する労働時間の長さが，フランス軍からしばしば指摘されている。また，アフリカ系アメリカ人兵と中国人労働者との摩擦も見られた[47]。この背景には，1882年の中国移民禁止法に象徴されるアメリカ社会のアジアからの移民に対する排斥の歴史が深く関わっていよう。イギリス軍の中国人労働者への対応もフランスのそれと比較すると異なる点が多いという。それぞれの国の軍によって中国人労働者への対応が異なることは，今後の研究にとって，20世紀初頭の欧米の「人種意識」の違いを論じる格好の材料となると思われる。

労働の現場では，フランス人はもとより，ギリシャ，ポルトガル，ヴェトナム，スペイン，モロッコ等多様な地域の出身の労働者たちが肩を並べて働いた。したがって，外国人労働者間の関わりも複雑であり，摩擦や対立も当然見られた。とりわけ，アラブ系とアフリカ系，アフリカ系と中国人は，よく摩擦を起こしていたという。たとえば，1918年には，仏領アフリカ植民地からの労働者と中国人労働者の間で，食料を巡って衝突があった事も報告されている。仏領インドシナからは，約5万人の労働者が動員されたが，当局は，中国人のナショナリズムが影響を与える事を懸念して，インドシナ植民地のヴェトナム人労働者と中国人を隔離しようとし

た。しかし，彼らは労働の現場で両者が一緒になると密接な関係を保ったという[48]。非白人労働者や移民労働者の多様性とその関わりもまた，当時のフランスの「人種」意識を考える上で必要な要素であろう。

理念や法律を中心に議論するフランス史研究者にとって，このような地域の摩擦の一つ一つは小さな事件だと思われるかもしれない。また労働の場での摩擦や対立は，「人種」ではなく労働者としての対立とみなされる部分もあろう。しかし，ヨーロッパからの外国人移民と異なり，個人の自由で労働の場を選べた訳ではなく，しかも出身地ごとに管理されたり，移動させられたりする実態において，労働者をくくる単位として「人種」は目に見える形で機能したと考えられる。「人種」の顕在化がこの時期に既に行われているアメリカ史を研究している研究者から見ると，このような地域の人々の接触と摩擦対立こそが，社会に広がる「人種意識」の核となると思われるのである。また，その後の20世紀の歴史とつなぐ視点も必要であろう。植民地史に詳しいアリス・コンクリンは，この労働の場での人種摩擦は，戦後北アフリカからの移民が流入する事によって，繰り返されたと論じている[49]。

3．フランスに上陸したアフリカ系アメリカ人

アメリカにおいても，アフリカ系アメリカ人の兵士に関しては議論が巻き起こった。とりわけ，白人に対して銃を向ける事になるから反対であるというアメリカの一部の人々の論理は，ヨーロッパでも見られたものである。また，その能力への疑問視も，ヨーロッパの「人種」意識と同様であったと言えよう[50]。40万人のアフリカ系アメリカ人がアメリカ軍に入ったが，すべて隔離された部隊であり，軍上層部は，アフリカ系アメリカ人兵を労働部隊としてのみ扱うべきだと考えていた。戦争中フランスに派遣された16万人のアフリカ系アメリカ人兵士のうちでも，8割は，アメリカ軍

のためにフランスの各港で働き，塹壕を掘り，家畜の世話や食事の世話をし，ごみを管理し，戦死者を埋葬した。ストヴァルの言葉を借りれば，圧倒的多数のアフリカ系アメリカ人兵は，ライフルではなくシャベルを持って働いていたのである[51]。

しかし，アメリカ海外派遣軍の司令官，パーシング将軍は，フランス軍から戦闘部隊を要請された時，白人のアメリカ軍を外国人指揮官のもとで戦わせる事を頑強に拒んでいたにもかかわらず，1917年12月にフランスに到着した第93師団の4アフリカ系アメリカ人部隊をフランスの指揮下にゆだねた。実際にフランスで戦闘に参加したアフリカ系アメリカ人は約4万2,000人であった[52]。戦争とナショナリズムの関わりから考えれば，星条旗のもとに戦うつもりであった彼らは，三色旗のもとに戦う事を余儀なくされたのである。

アメリカ軍は，フランスにおいても，母国の人種秩序を守ろうと試みた。アフリカ系アメリカ人兵は，フランス女性に近づかない，フランス人の家庭やカフェに出入りしないように命じられ，フランスのある基地では，命令に背いて基地の外でフランス民間人と交流したという規則違反でアフリカ系アメリカ人兵が投獄されたという。1919年の7月14日のパリでの戦勝記念のパレードに，イギリスやフランスの植民地の非白人兵が参加していたにもかかわらず，勇敢な戦いぶりでフランスの勲章を授与されたアフリカ系アメリカ人部隊の参加をアメリカ軍は禁止した。これもアメリカ白人社会の考える人種秩序を乱す懸念があったからであろう[53]。

ある白人退役兵の証言によると，休戦後，ミューズ・アルゴンヌのアメリカ戦没者墓地の担当になった部隊は，戦死者を運び，埋葬する仕事をすべて6,000人のアフリカ系アメリカ人兵士に任せており，白人兵は実際に触れる事はなかった。別の白人兵の証言によると，埋葬の仕事をするために銃は必要なかったが，銃がないと労働者，あるいは奴隷を想起させるので，「黒人兵」はあくまでライフルを持つことにこだわり，歩兵部隊とし

て戦死者の埋葬にあたった。一方，終戦のために銃を持てなくなった白人兵は，「黒人」兵との緊張に備えてドイツ兵の銃等を探してきて武装した。証言した退役兵は，この緊張関係について「人種戦争」という言葉を使ったという[54]。

このライフルかシャベルかという問題は，アフリカ系アメリカ人にとって重要であった。彼らは，戦場で戦う事が，愛国心と男らしさ，さらには完全なシティズンシップを求める資格の証明になると信じたからである。したがって，フランスに送られたアフリカ系アメリカ人兵の20％しか戦闘に参加できなかったにもかかわらず，アフリカ系アメリカ人の残した第一次世界大戦関連の手記は，彼らの参加した戦闘を物語る事に偏っている[55]。たとえば，第369アメリカ歩兵部隊（フランスでの呼称）の中隊長であったアーサー・リトルは，アフリカ系アメリカ人がフランスから勲章をもらい，それがアメリカの新聞に掲載された事や，帰国時には勝利記念のパレードに参加して，歓迎を受けた事を強調している[56]。

アメリカ軍当局はアメリカ軍内部だけでなく，フランスに対しても，人種隔離政策をとることによってアメリカ人の「文化的に敏感な感性」を尊重するよう要望した[57]。アメリカ軍にフランスから派遣されたリナール大佐は，アフリカ系アメリカ人兵を賞賛したり，フランス民間人がアフリカ系アメリカ人と接触することは，白人アメリカ軍の士気を低下させるといわれ，フランス軍将校に警告するように，フランス軍司令部に助言している[58]。ストヴァルによると，アメリカ軍当局は，アフリカ系アメリカ人が白人と同等に扱われる事にフランスで慣れて，本国に戻ったときに同様の待遇を求める事を恐れたという[59]。

しかし，フランス政府や議会はこの要望に反対し，多くのフランス人は，人種隔離の要請をほとんど無視した[60]。イギリス軍がアフリカ系アメリカ人部隊を拒んだのとは対照的に，フランス軍は彼らを受け入れている。ストヴァルは，アフリカ系アメリカ人とフランス人との出会いに関し

て，フランス人にとってアフリカとは野蛮で，ジャングルを駆け巡り，非文明的である事を意味し，アフリカ系アメリカ人が英語を話すなど「文明化」されていることに驚きがあったという[61]。ただ，一時的に参加したアフリカ系アメリカ人兵と仏領植民地アフリカ兵とでは，待遇が異なるのは当然であろう。また，戦後，フランスは確かに，アフリカ系アメリカ人のアーティストを厚遇した。しかし，オースランダーによると，ジョセフィン・ベーカーに見られるように，アフリカ系アメリカ人文化といっても，パリは，アフリカの香りがするエキソティシズムを求めていたという[62]。果たして，アフリカ系アメリカ人の経験や言説はどこまでフランスの「人種」意識の希薄さ，あるいは「寛大さ」の証左となるのだろうか。さらなる検討が必要であろう。

4．「人種」意識とジェンダー

「人種」意識は常にジェンダーと深く関わっている。19世紀後半の植民地拡大とともに，フランスでもイギリスでも看護婦や女性の宣教師等による「文明化の使命」が叫ばれた。と同時に，植民地の「原住民」男性の「抑制の利かない性」の対象になる「危険と恐れ」が論じられていた。この白人女性の保護に関する不安が第一次世界大戦の戦場で拡大されたといわれる。フランスにおいても，郵便検閲担当の報告では，特に非白人とフランス人の性的関係に関する懸念が多かった。新聞でも，フランス人女性，特にミドルクラスの女性にとって植民地からの非白人が誘惑的であるという戯画が多く掲載された[63]。1915年以降南仏につくられた仏領植民地アフリカ兵のための病院では看護をすべて男性が行う事を定める等，当局がフランス人女性と仏植民地アフリカ兵の親密な関わりを妨げようとする動きも見られた。「戦時代母」に対しても，アフリカ人は「女性を蔑む」という警告を出し，あまり近い関係にならないようにというアドヴァイス

が出された[64]。

しかし，現実には，仏領植民地アフリカ兵とフランス人女性の関係に関して，おおよそのフランス国民は特に気にしなかったと論じる研究もある[65]。看護婦の手紙や手記を集めた研究者によると，必ずしもステレオタイプを再確認するのではなく，個人と個人の対応があった事が分かる[66]。ただし，ジェンダーの問題においても，地域の労働の現場ではより緊張が高まった。1918年には，工場労働者の約15%が女性であり，女性のストライキに対するスト破りとして非白人労働者が使われているなどという言説が広まった。ある兵士の手紙には「黒人が私たちの妻を虐待している」といった文言も見られた[67]。中国人労働者とフランス人女性の結婚も多く見られ，フランス政府はなんとか制限しようとしたという。また，フランス人女性と非白人労働者との交際を巡って，地域の人々との間で対立や乱闘騒ぎに発展する事もあった[68]。

ジェンダーと「人種」認識の問題にアメリカ軍が入ってくると，事態はさらに複雑になる。1918年8月には「黒人アメリカ兵に関する極秘情報」というガイドラインがフランス側に流され，それには，「異人種間混交」を防ぐために厳格な隔離をする提案が入れられていた。フランス人，特にフランス人女性とアフリカ系アメリカ人の親密な関係は，白人アメリカ人にとって不快，あるいは侮辱的であると記しているのである。また，数人のアフリカ系アメリカ人兵がフランス女性を誘おうとしたとしてアメリカ軍警察から銃撃を受けた記録もある。さらに，非白人兵とフランス女性の交際や彼らとフランス民間人の付き合いを巡って，白人アメリカ兵とフランス民間人との間で暴力事件も起こっている[69]。従軍牧師のジョセフ・シンプソンはアメリカ軍とフランス警察の脅しによって，一般のフランス人女性は，「売春婦」と思われる事を心配してアフリカ系アメリカ人兵とつきあう事を躊躇していたと，報告している[70]。アフリカ系アメリカ人兵の権利を擁護しようとしていた人々も，異人種間の男女の親密な関わりにつ

いては困惑の色を隠せなかった。ラヴィング少佐は戦争を通じてアフリカ系アメリカ人兵を援護していたが，「どの白人男性も，黒人男性と白人女性が関わるところを見たくない……そうなればフランスにいるアメリカ人の間で人種戦争が起こるかもしれない」と指摘し，終戦後はできるだけ早くアフリカ系アメリカ人兵を帰国させる事を進言した[71]。

アメリカ社会の外に出て初めて，異人種間の親密な関わりに関して露骨に拒否を示すアメリカの姿勢が世界のなかでも例外的であろうことが明らかになった。同時期のアメリカ南部社会では，アフリカ系アメリカ人に対するリンチ事件が多発していたが，その正当化のための主要な理由の一つも，アフリカ系アメリカ人男性によって白人女性が傷つけられたという言説であった。さらに，19世紀後半以降の異人種間結婚禁止法の多数の州への広がりをあわせて考えると，アメリカ社会の持つ根深い問題がフランスへ輸出された事が分かる。

しかしながら，フランスにとって全く関わりのない問題とも言えない。先述のようにフランス軍や政府も異人種間の関わりには敏感になっており，地域で実際に事件も起こっていた。さらに，1920年代に入ると，フランスと植民地の関係では，ジェンダーと「人種」意識の関りがより鮮明になった。フランス人とアフリカ人の性的関係が非難されるようになり，異人種間混交とその結果がフランス支配にどのような影響を与えるかについて懸念が深まったという。また，優生学，社会衛生，出産奨励等が政府によって支援された。直接「人種」を明言してはいないが，優生学や社会衛生が「人種」を意識していることはよく知られているところである[72]。本土への大量の非白人の流入とその結果としてのいわゆる「混血」も，植民地社会とは異なる問題を投げかけたのではないだろうか。どの国民国家にとっても国民の境界を画定する必要があるからである。第一次世界大戦中のフランスにおける「人種」とジェンダーの関係は，フランス，そしてアメリカのかかえる問題を顕在化させる一つの要因であったと言えよう。

5．今後の展望

本論の意図は，フランスの人種主義の事例をことさらに並べて，アメリカとの共通性を論じる事ではない。筆者の本来の目的は，第一次世界大戦期に普通のフランス人が実際の生活，さらには極限状態にある戦場で大量の「非白人」と接したときに，どのような「人種」認識の歴史が生まれるか，アメリカ社会の「人種」認識が異なる社会に持ち込まれた時，アメリカ白人，アフリカ系アメリカ人，そしてフランス人がどのように対応したかを分析することによって20世紀初頭の欧米の国民国家確立期における「人種」の問題を考えることであり，本論は，その第一歩にすぎない。理念や法律ではなく社会の視点に立った時，「カラー・ブラインド」なフランスという見方に対して現実はどうだったかという観点から論じることが多い英語圏の研究は，この問題に関してさまざまな論点を提供しているといえよう。しかし，フランスの「人種」認識の現実を示すだけでは，比較史的な研究という事はできないだろう。その「人種」の現実がフランスの主流の考え方に認識されない，あるいは積極的に否定される歴史がどのように作られたのかを考えなければならない。この点に関しては，フランス独自の問題とともに，植民地の支配・被支配という枠組の中で「人種」をみえなくする帝国主義体制も考察する必要があろう。翻って，アメリカがすべての側面において「人種」認識に敏感である事がフランスの戦場で明らかになったが，そのことがどのような影響をアメリカおよびフランス社会に与えたかも考えていきたい。

また，本論をまとめた事によって，外国史研究では逃れられない翻訳の問題が検討すべき課題として浮かび上がってきた。たとえば，フランスで「同化」は重要な概念であるが，英語でも似た言葉で表されるアメリカでの「同化」の概念とは，どうもきれいに重ならない。アメリカ史研究で

は，「同化」という言葉は，英語を話し，アメリカ的価値観を受け入れ，アメリカ的生活を送る事という意味で使う。したがって，普遍的でも絶対的な概念でもなく，それぞれの時代の主流の集団の価値観が反映された歴史的に相対的な概念であり，主流社会から周辺への「同化」の強制が起こりうるのである。フランスの場合，植民地の「原住民」が市民権取得の審査にあたって，フランス語，フランス的家族形態，生活様式等が必要要件とされたという[73]。この場合は，たしかにアメリカ史で使う「同化」の意味に近い。しかし，たとえば，平野は植民地の人々の「フランスの一般市民と同等の権利を得る事」への要求をフランスへの「同化」の要求という言葉で置き換えているが[74]，アメリカでは，そのような権利の要求はアメリカの理念上当然の事であり，「同化」という言葉にはあたらないのである。同様に，「普遍主義」，人種主義における科学と文化の区別等の概念も翻訳の観点からも比較検討の課題である。

本論では，フランスの外から第一次世界大戦期のフランスの「人種」関係を分析した研究をまとめたことで，多様な課題が浮かび上がってきた。今後は，フランス人研究者の仕事を精査し，さらに，既に調査した米仏の複数のアーカイブスの資料を分析して第一次世界大戦の現場に立ち戻る事によって，フランスが「人種」に関する現実をどのように受け止めたか，さらにアメリカ人がそれをどのように理解したかを，立体的に検討する計画である。

［付記］ 本稿は科学研究費基盤研究（C）24520842の研究成果の一部である。

註

1） ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌』森千香子訳（明石書店，2007年）（原書の出版は，1998年）36-37，182頁。

2） 平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』（岩波書店，2014年）343，345-346頁。同『アフリカを活用する』（人文書院，2014年）では，より詳しくアフリカ人兵の歴史が論じられているが，植民地の支配・被支配の関係が中心

で「人種」にはあまりふれられていない。

3) *Crisis*, June, 1918.

4) Mark Whalan, "Not only war ; the First World War and African American literature" Santanu Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* (Cambridge UP, 2011) 284.

5) たとえば，松沼美穂『植民地の〈フランス人〉』（法政大学出版局，2012年）95頁。

6) Tyler Stovall, *Paris Noir* (Houghton Mifflin, 1996) xiii.

7) Fred Constant, "'Black France' and the National Identity Debate" in Trica Danielle Keaton et al eds., *Black France/France Noire* (Duke UP, 2012) 124.

8) Sue Peabody and Tyler Stovall, "Race, France, Histories" Sue Peabody and Tyler Stovall eds. *The Color of Liberty : Histories of Race in France* (Duke University Press, 2003).

9) Das ed., *Race, Empire and First World War Writing*.

10) Kimloan Hill, "Sacrifices, sex, race ; Vietnamese experiences in the First World War" in Santanu Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 53-69.

11) Das, *Race, Empire and First World War Writing* 4-5, 17.

12) 本論では，仏領アフリカ植民地生まれの非白人の兵士を「仏領植民地アフリカ兵」としたい。

13) Charles John Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms : West Africans and the French Military, 1885-1918* (Crossroad Press, 1979) 57.

14) Richard Fogatry and Michael A. Osborne, "Constructions and Functions of Race in French Military Medicine, 1830-1920" in Peabody and Stovall eds., *The Color of Liberty* 216.

15) Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 71-74.

16) Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 77-78.

17) Fogatry and Osborne, "Constructions and Functions of Race in French Military Medicine, 1830-1920" 215.

18) Joe Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* (Heinemann, 1999) 159-161.

19) Dana S. Hale, "French Images of Race on Product Trademarks during the Third Republic" in Peabody and Stovall eds., *The Color of Liberty* 138-139.

20) Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 18-19 ; Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 37 ; Christian Koller, "Representing otherness ; African, Indian and European soldiers' letters and memoirs" in Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 127-142.

21) Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* 161-2.

22) Paul Jankowski, *Verdun* (Oxford UP, 2013) 183.

23） Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* 167-176.
24） Koller, "Representing otherness" 127-142.
25） Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 82.
26） Alice L. Conklin, *A Mission to Civilize* (Stanford UP, 1997) 151-155.
27） Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 100.
28） Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* 144-146.
29） Anthony Clayton, *France, Soldiers and Africa* (Brassey's Defence Publihsers, 1988) 250.
30） Joe Lunn, "France's legacy to Demba Mboup? A Senegalese griot and his descendants remember his military service during the First World War" in Das, *Race, Empire and First World War Writing* 113 ; Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 102-106.
31） Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 85-88.
32） Alice L. Conklin "Who Speaks for Africa?" in Peabody and Stovall eds., *The Color of Liberty* 304.
33） ディアニュに関して，加茂省三「アルベール・サローによるフランスの対西アフリカ植民地政策とブレイズ・ディアニュ」『法学政治学論究』慶応義塾大学大学院35（1997年）；松沼『植民地の〈フランス人〉』；平野千果子『フランス植民地主義の歴史』（人文書院，2002年）。
34） Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 94-5.
35） Conklin "Who Speaks for Africa?" 324-5.
36） Richard Rubin, *The Last of the Doughboys* (Houghton Mifflin Harcourt, 2013) 262-3.
37） Lunn, "France's legacy to Demba Mboup?" 116.
38） Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* 109.
39） Conklin, "Who Speaks for Africa?" 312 ; Alessandra Lorini, *Rituals of Race* (UP of Virginia, 1999) 145-7.
40） Shelby T. McCloy, *The Negro in France* (Haskell House Publishers, 1973) 4.
41） 渡辺和行『エトランジェのフランス史』（山川出版社，2007年）108-109頁。
42） Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* ; Conklin, *A Mission to Civilize* 164.
43） Leonard V. Smith et al., *France and the Great War 1914–1918* (Cambridge UP, 2003) 134-5.
44） Xu Guoqi, *Strangers on the Western Front* (Harvard UP, 2011) 119-125.
45） Paul J. Bailey, "'An army of workers' : Chinese indentured labour in First World War France" in Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 35-52.
46） Kimloan Hill, "Sacrifices, sex, race ; Vietnamese experiences in the First

World War" in Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 53-69.

47) Guoqi, *Strangers on the Western Front* 152-173.

48) Guoqi, *Strangers on the Western Front* 141-2.

49) Conklin, *A Mission to Civilize* 164.

50) Stovall, *Paris Noir* 4-5.

51) Stovall, *Paris Noir* 7.

52) Mark Whalan, "Not only war ; the First World War and African American literature" Das ed., *Race, Empire and First World War Writing* 285-6.

53) Stovall, P*aris Noir* 22.

54) Rubin, T*he Last of the Doughboys* 292-296.

55) Rubin, *The Last of the Doughboys* 292-296.

56) Arthur Little, *From Harlem to the Rhine* (1936) in Jay David and Elaine Crane eds. *The Black Soldier* (William Morrow, 1971) 109-130.

57) Stovall, *Paris Noir* 10.

58) Jennifer D. Keene, *Doughboys, the Great War, and the Remaking of America* (The Johns Hopkins UP, 2001) 103.

59) Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 112, 113.

60) Rubin, *The Last of the Doughboys* 263, 267 ; Stovall, *Paris Noir* 18.

61) Stovall, *Paris Noir* 16.

62) Leora Auslander and Thomas C. Holt, "Sambo in Paris : Race and Racism in the Iconography" in Peabody and Stovall eds., *The Color of Liberty* 168-170.

63) Smith et al., *France and the Great War 1914-1918* 134.

64) Lunn, *Memoirs of the Maelstrom* 163.

65) Balesi, *From Adversaries to Comrades-in-Arms* 118 ; Anthony Clayton, *France, Soldiers and Africa* 250.

66) Alison S. Fell, "Nursing the other ; the representation of colonial troops in French and British First World War nursing memoirs" in Das, *Race, Empire and First World War Writing.*

67) Smith et al., *France and the Great War 1914-1918* 62,125.

68) Guoqi, *Strangers on the Western Front* 149-151.

69) Stovall, *Paris Noir* 10, 14-15.

70) Jennifer D. Keene, *Doughboys, the Great War, and the Remaking of America* 129.

71) Keene, *Doughboys, the Great War, and the Remaking of America* 103.

72) Conklin, *A Mission to Civilize* 164-165.

73) 松沼美穂『植民地の〈フランス人〉』25頁。

74) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史』268頁。